

強者の戦略

どうだったでしょうか？「読めたつもり」になっていないか、確認しましょう！

次の文章は作者を西行に仮託した説話集『撰集抄』の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。

播磨国と聞こえしなんめり。「おぼろけならでは人もかよはぬ山の中に、杣する人の三人つれて入り侍りけるが、山中を見めぐりけるに、山の谷あひに木暗きこともいたくはなかりける所に、木の枝、木の葉などにてとかく構へたる、形ばかりなる庵に、木の葉を敷きつつ、黒き衣ばかり着たる僧の死にて侍りけるを、鳥の来てありけると覺えて、目なんども突き損じて侍り。かたはらにけしかる硯・筆ばかり侍り。大きな木にかく書き付け侍り。『死生共に死生にあらず。無来無去にして本来寂靜なり』と書きたりと語り侍りけれど、その里の人、尋ねいたりて見ることもなく、やみ侍りし」と伝へ聞きき。

いかなる人にていまそかりけん。Aかへすがへすゆかしく侍り。谷の深きに隱居して、峰の松風に思ひをすまず禅僧にこそ。いづれのころよりの所に住みけん。庵なんどは神さびて古めかしきさまに見えけるなれば、年経けるにこそ。「何とて露の身をさきゆるわざも侍りけるやらん」と、心苦しく貴く侍り。生死も生死にあらず、また来も去もこれには侍らざりけん。「心の中、やるかたなく澄みわたり侍りて、かやうの座禅などは、世の末には難かるべし」など言ふ人も侍りければ、かならずしもさは侍るまじきにや。かた岡山のわび人の、機も餓えて、臥していまそかりけることなどを伝へ聞き侍るには、「B座禅の機は、なかなか当時そのころにや侍らん」とおぼえ侍り。あはれ、貴かりけることかな。硯よりほかには何も持たざりけんも、よしありておぼえ侍り。

世をのがるる人のありさま、しなじなに侍れども、海の辺、深山のすまひは、ことにうらやましくも侍れど、さしあたつては、身一つ助くる糧のはかりがたさに、独居の太山のすまひもかなひがたくて、世に経るぞかしな。詮は、ただこの身を惜しみ、かへりみる思ひの、はなはだしきにこそ侍れ。何にかこの身を惜しむべき。惜しまずは、なか山深く思ひ澄まさで侍る。Cそもそも、「本来寂靜なり」とは何の寂靜ぞや。「無来無去なり」とは何のものをか指し侍りけん。

注 ○杣する人——きこり樵。

問一 傍線部Aのように筆者が述べたのはなぜか。わかりやすく説明せよ。

問二 傍線部Bを現代語訳せよ。

問三 傍線部Cで筆者が述べたかったことは何か。本文全体を踏まえて、わかりやすく説明せよ。

強者の戦略

【解答】

問一 播磨国の人里離れた山中に隠遁して清貧のまま寂滅した尊い隠者がいたが、里の人は見にも行かず、隠者の来歴や最期の様子を詳しく知りたく思ったから。
(七〇字)

問二 座禅の機縁は、かえって現在のような末法の世にございますのでしょうか。
(三四字)

問三 世俗を離れ独り隠遁して寂滅した立派な隠者の言葉を引き、永遠不変にして世の本質である仏道の境地を再確認することで、深山幽谷での孤独な仏道修行を望みながらも自分の身を惜しむあまり隠遁することができない作者自身や世の人々に対し、自省を促している。
(一一〇字)

【解説】

問一 まずは傍線部「ゆかし（＝見たい・聞きたい・知りたい）」の訳を踏まえ、「隠者の最期の様子を知りたいと思つた」旨を明確にしよう。次に、その理由を記述する。これは主に「隠者が立派な最期を遂げたこと」「詳細が分からないこと」の二点がポイントとなるが、本文のまとめも意識して、隠者の様子や、里の者が見にも行かなかった点も触れよう。

問二 傍線部の直訳は「座禅の『機』は、かえって『当時』その時でございましょうか」であるが、「機」「当時」の訳し方と「かえって」のニュアンスを訳に反映するのがポイントとなる。ここで注意すべきは、傍線部の2、3行前の「かやうの座禅くさは侍るまじきにや」である。「世の末」が「仏道の衰える末法の世」を意味するという古典常識があれば、「末法の世には座禅などの仏道修行は難しい」という論者に対して、筆者が「そうではない」と反論している主張が読み取れる。これを意識するならば、傍線部は「座禅の『機縁（機会）』はかえって『現在』のような末法の世にこそあるのではないか」という趣旨だと理解できるだろう。なお、直前の「かた岡山」は「片岡山説話」という有名な説話であるが、ここでは「いまそかり」という尊敬語もあることから、立派な出家者の逸話であろうことが読み取れていれば良い。

問三 まず隠者の言葉であることも鑑みて、「寂静」が「寂しく静かな状態（＝仏道の境地）」「無来無去」が「来ることも去ることもない（＝生や死は表面上のものに過ぎない）」という内容を文脈から押さえる。そして筆者が「そもそも『本来寂静』や『無来無去』とはいったい何だ」と述べているのは、筆者がその内容を本当に知らないとは考えづらいことから、一種のレトリックであり、本当に疑問を呈しているというよりは、「今一度しっかり考えるべきだ」と述べていることを理解しよう。後は本文の前半の要約としての「隠者」の様子と、それに引き比べて、本文後半で述べられた隠遁できない人々について記述する。なお、本文後半に「うらやまし」とあることから、隠遁できない人々には筆者自身も含むと考えるのが自然だろう。

【通釈】

播磨国と申し上げたようだ。「並大抵でない者でなければ人も通わない山の中に、樵をする人で仲間を三人連れて入りました者が、山中を見て歩いたところ、山の谷間で木暗いこともひどくはなかった所に、木の枝や木の葉などでなんとか作った、形だけの庵に、木の葉を敷きつつ、黒い衣だけを着た僧が死んでございましたが、鳥が来ていたと思われて、目なども突き損じてございます。傍に見馴れない硯と筆だけがございます。大きな木にこのように書き付けています。『死生共に死生にあらざ。無来無去にして本来寂靜なり（死と生はともに死と生ではなく、生も死もない。仏の法身は来ることなく、その里の人は尋ねて行つて見ることもなく、そのまま終わつてしまひました」と伝え聞いた。

どのような人でいらつしやつたのだろう。重ね重ね知りたく思います。谷の深いところに隠れ住んで、峰の松風に思いを澄ます禅僧でいらつしやるのだろう。いつの頃からその所に住んでいたのだろう。庵などは神々しく古めかしい様子に見えたそうなので、長年の年月を経ていたのでしょうか。「何といつて露のようにはかない身を支える方法もございましてのしようか」と心苦しく尊くございます。生も死も生や死ではなく、また来ることも去ることもこの方にはなかったのでございましょう。「心の中がとてつもなく一面に澄みきりまして、このような座禅などは、末法の時代には難しいだろう」などと言う人もございますが、必ずしもそうではないのはございませぬか。片岡山の貧しい人が、衣服もなく餓えて、横になつていらつしやつたことなどを伝え聞きますと、「座禅の機縁（機会）は、かえつて現在その時でございましょうか」と思われます。ああ、尊いことであつたものだ。硯の他には何も持たなかつたようなことも、奥ゆかしいことに思われます。

世を逃れる人の様子は、様々でございますが、海の周辺や深山の住まいは、特にうらやましくもございますが、さしあつては、自分の身一つを助ける食料の画策し辛さに、独りで暮らす深い山の住まいも叶い辛くて、俗人として世間で暮らすのであるなあ。結局は、ただ自分の身を惜しみ、気に掛ける思いが、甚だしいのであるよ。どうしてこの身を惜しむべきだろうか。惜しまないならば、どうして山の深くで心を澄まさないのでしょうか。そもそも「本来寂靜なり」とは何が寂靜であるのか。「無来無去なり」とは、どのようなものを指したのでしょうか。（一度考えてみるべきでしょう。）